

I 事業の概要（地域の実情含む）

(1) 津波防災啓発活動について

平成 27 年、第 17 回水大賞の名誉総裁秋篠宮殿下のお言葉や、平成 26 年に実施した関西・四国遠征のアンケートの結果、災害の記憶の風化や津波防災危機意識の啓発を伝えることが重要であるとの意見を頂き、継続して活動を行ってきた。本年度実施の疑似津波実演会は総計 13 回、その内訳は学校関係が 7 回、イベント関係が 6 回であり、震災後最も少ない回数となった。小学校では震災後最低となる 5 回であった。中学校の実演会はしばらく行われていない。高校は 2 回である。年々実演回数が減少してきている。

年度	小学校	中学校	高校	大学	イベント				合計	震災前・後
					市内	県内	県外	他		
17年						1			1	61
18年	1					4	2		7	
19年	2				3	4	2		11	
20年	3	1			3	1		2	10	
21年	5	1			4	2		2	14	
22年	8	2			4	2		2	18	
23年			3					1	4	117
24年	5	1	1	4	2		1	4	18	
25年	5	2	2	2	1	1	2	2	15	
26年	5		2		4	1	5	1	18	
27年	5		3	2	4	1		2	17	
28年	6		4	3	1	1	1	1	17	
29年	7		1	1	5			1	15	
30年	5		2		3	1	1	1	13	
合計	57	7	18	10	34	19	14	19	178	
					92				86	

表－1 実演回数

(2) 南海トラフ模型の製作について

一昨年度から引き継ぎ、南海トラフ模型を継続して製作している。250,000 分の 1 の模型は、宮崎県日向灘沖から千葉県と茨城県境の約 1,000 km 間で南海トラフと相模トラフが連なっている。長さ 4 m15 cm×幅 1 m80 cm×高さ 18 cm である。本年は地上 200m から作業を開始した。加工で 200m 毎ベニヤ板を切断し組み合わせていく。海拔 200m から 400m の作業に長時間を要した。500m 前後の山が多く散らばっている。作業に困難を極め、多くの時間を費やした。

II 取組の概要

(1) 津波防災啓発活動について

ア 児童・地域住民合同の実演会達成

昨年実演会を実施した花巻市立八重畑小学校での様子について、赤前小学校の校長先生に情報提供したところ、今年度は、PTAをはじめ、学校支援者や地域住民の方が実演会に参加した。地域のことなら、長年この地に住んでいる方が、隅から隅までわかっており子供たちに教えている様子が印象的だった。赤前小学校付近は、養殖漁業を営む方が多く、海に関心のある人も多い。また、赤前小学校は大きな学校ではないが、全児童で実演会に参加していただける学校であり、将来、地域を守る大人に成長してくれるものと思う。



図－1 赤前小学校実演会

写真は地域住民の方が熱心に児童に話されているところである。本校生徒は、実演会の準備作業のため、このときのお話を聞くことができず、地域の生の声を聞いて学ぶ機会を逃してしまったことに、悔しい思いをしていた。実演会においては、模型上に描かれている地域の説明を行った。

イ 海外からの見学者

マレーシアのコタキナバル市から津波実演会の見学のため、一昨年度に続き 2 回目となるアーメダシャー高校が来校した。本校において、交流会と津波模型による疑似津波を体験した。町並みが津波に襲われると声が上がっていた。

生徒は、この実演会のため前年度末から英語によるプレゼンを練習してきた。4 月からは昼休みと部活動の時間を調整し、英語科教員の指導を受けながら発音やイントネーションなどの練習を重ね、津波実演会を英語で紹介することができた。津波模型やプレゼン、被害の写真を初めて見たアーメダシャー高校の生徒は、真剣な表情で理解に努め、何枚も写真を撮影していた。



図-2 アーメダシャー高校実演会

ウ 「世界津波の日」2018 高校生サミット in 和歌山

昨年10月31日から11月1日まで和歌山市において、国内49校186名、海外47ヶ国293名が参加して高校生サミットが行われた。開会式・記念植樹・記念碑除幕式に参加した後、分科会・総会に出席した。分科会では日頃の活動を紹介した。本校の生徒は、活動実績の豊富な自分たちと災害の少ない国や地域とでは、災害に対する考え方に違いがあることを改めて理解していた。また、サミットでは英会話の必要性も強く感じていた。



図-3 岩手からの参加者一同

(2) 模型製作の体験について

ア ふっこう支援掛川が2年続けて来校

静岡県ふっこう支援掛川が来校し、津波模型疑似実演・被災パネル・プレゼンを見学した後、昨年同様、模型造りを体験した。今回は、ベニヤに貼り付けた地図の等高線にペンで色をつける作業である。切断の際、間違いを防止するためのもので、25万分の1の地図では等高線の間隔が非常に狭い。そのため、一枚の板を切り抜くにしても準備に時間がかかる。事前の作業をすることによりベニヤの切断作業が正確になり、間違いが少ない。

本校生徒は、はじめて体験する掛川の皆さんの相談やお手伝いを担当した。作業は決して難しくないが、等高線の間隔が狭いため線を見失わないように拡大鏡を使うなどのアドバイスをしていた。型板をつくる作業の難しさを知った掛川のス

タッフは、この経験を生かして、自分たちの地域の模型を作り、地域のために生かしたいと話していた。

Ⅲ 取組の成果と課題

(1) 疑似津波実演会について

疑似津波実演は、活動を継続する。今後もプレゼンで津波のメカニズムや歴史などを紹介する。しかし、最近の自然災害は大型化と発生数も多くなってきている。岩手県沿岸部は平地の面積が少なくリアス式海岸のため山が高いので土砂災害の危険度が高い。そのため、大雨に伴う災害や、避難についての呼びかけを怠ってはならない。安全に避難できるようにプレゼンを通して呼びかけていきたい。

(2) 模型製作について

ア 今年度は海拔200mから製作

一部1,000mまで終わっているところもある。作業の都合上、中部地方と紀伊半島を完成させ、未だ手をつけていない四国地方に続き、中国地方、九州の一部の順に製作する。

イ 400m毎に高度が分かるように着色

高度により色分けを行い、居住地域や山岳の区別が容易に分かるようにする。間隔は400m毎に薄い茶色から3000m付近で濃い茶色に色分けして高度が安易に分かるようにする。場合によっては線状降水帯のような気象災害に役立つ可能性があるかもしれない。

0 から 200mまで	緑 (居住多数範囲)
200 から 600mまで	薄い茶色
600 から 1000mまで	↓
1000 から 1400mまで	↓
1400 から 1800mまで	↓
2200 から 2600mまで	↓
2600 から 3000mまで	濃い茶色

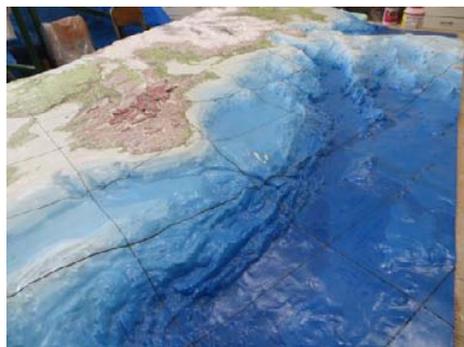


図-4 製作中の模型